

1. はじめに

私は、小学校教諭免許を取得後、教員として子どもたちとともに生活し、ともに学んでいく。そのために必要な内容を大学生活のなかで吸収している。いろいろな角度から「教育」について触れるうちに、海外の教育事情について興味を持つようになった。日本の教育のあたり前は世界の教育にも当てはまるのか。海外ではどのような教育を目指しているのか。給食はあるのか。さまざまな疑問と期待を胸に今回のシンガポール教育研修への参加を決めた。

町の中にはさまざまな民族の人々、さまざまな宗教文化、さまざまな言語が存在していた。それもそのはず、シンガポールには中華系民族、マレー系民族、インド系民族があり、多民族・多国籍国家なのである。そのため公用語も英語、中国語、マレー語、タミール語と多くあり、宗教は主にキリスト教、仏教、道教、イスラム教、ヒンズー教である。日本との違いに驚くとともに、いったいここはどこなのだろうとさえ思った。驚きは教育の現場にも溢れていた。今回の教育研修では Marymount Convent School、Invictus International School、St. James' Church、Little Skool House の計4つの小学校や幼稚園を見学させていただいた。

2. 小学校のシステム

シンガポールの小学校を訪れて気づいた特色についていくつか紹介する。まず1日の流れが日本と大きく異なる。シンガポールの小学校の授業は朝 7:30 から始まり 13:30 には終える。そのため給食はなく家に帰ってから昼食をとるそうである。しかしお腹はすいてしまうので、授業の合間の 20 分休憩に持参したお弁当や購買で買った軽食を食べてお腹を満たすそうである。購買には飲み物や麺もの、寿司が売っていた。また文房具やおもちゃを買うことが出来る購買もあり、どこも児童で賑わっていた。

また教室の種類が多いように感じた。体育館や音楽室、美術室、またダンススタジオや新体操専門体育館が完備していた。設備内容はまるで大学のような専門性があり驚いた。教育カリキュラムの中に CCA という才能を伸ばす教育がある。これは音楽や芸術、スポーツなどから児童が自分で選択して学ぶ教科である。誰にでも才能はあるため、打

ち込めるものを見つけて児童一人ひとりの良さを伸ばそうという信念のもと組まれている。日本のクラブ活動にあたる教科と考えられる。おそらく素晴らしい設備の数々はこの CCA をより充実させるために設けられたのではないかと考えた。

また 2018 年から教科化されることで注目を浴びている道徳。シンガポールに道徳という教科は存在しないが、CCE という国民教育がある。その授業では愛国心教育や多様な価値観などについて学ぶそうである。シンガポールは国土面積も小さく、人口も決して多くはないので、将来シンガポールに残り、シンガポールを引っ張っていく人材を育成するために欠かせないという。また多民族・多国籍国家であるため、お互いの文化を受け入れる姿勢を育てる目的もある。ここにはその国ならではの社会的背景があった。

その他にも、シンガポールは経済協力開発機構 (OECD) が行う学習到達度調査 (PISA) で好成績を収めているため宿題が多いと思いきや、15 分以上時間がかかると思われる量の宿題は出してはいけないという決まりがあったり、図書室の本は種類別だけでなく、さらに言語別にも棚が分かれていたりと驚きがたくさんあった。学校のいたるところに日本との文化の違いが現れていた。



Type of Food/Drinks	Prices
Mineral water	\$0.60
F & N fruit juice	\$0.95
Meiji milk	\$0.95
Yakult	\$0.80
Milo	\$0.85
HL milk	\$0.95
H2O	\$0.70
Yeo's Green Tea	\$0.70
Yeo's Chrysanthemum Tea	\$0.70



3. 食育について

日本の小学校では給食の時間に食育を行うことがメインである。一方、給食の時間がないシンガポールの小学校では保健体育の時間に行っているという。先ほど述べたよう

にシンガポールは多民族・多国籍国家であるため、さまざまな宗教が混在する。宗教によっては食の制限がとても厳しい。また、食事の仕方やマナーも宗教ごとにさまざまである。そのため日本のように実際に食べることを通して学ぶことは難しいだろう。そもそも日本のような給食システムを取り入れること自体が難しいのではないかと思った。

インターナショナルスクールでは、お弁当を持参したり配達を利用したりしている。この際の配達には、親がインターネットで注文するので食材を選ぶことができる。そのため、この方法によって宗教による食の制限への対応だけでなく、アレルギー問題への対応もまかなうことが出来るのである。

当たり前だと思っていた給食のシステムがシンガポールでは全く当たり前でなく驚いた。また日本ではあまり感じないが、食育は思っている以上に繊細な教育内容なのかかもしれないと感じた。

4. 幼稚園、早期教育

経済協力開発機構（OECD）が実施する学習到達度調査（PISA）の教育ランキングで1位を独占するシンガポールでは早期教育が行われている。その実態について調べた。まず1クラスを受けもつ担任の先生についてである。必ず2人の担任の先生が付いており、英語で話す先生と中国語で話す先生が、取り組みの内容によって入れ替わる。園児たちは日ごろ英語と中国語を耳にしているのである。シンガポールでは英語と同じくらい中国語が多用されている。そのため、学力向上が目的ではなく、多民族・多国籍国家という社会的面から必要とされた語学教育なのではないかなと思った。幼稚園にも体育や音楽、アートの時間があり、これらの時間は中国語で話す先生が担当するそうである。中国語を使うことに対して園児たちに好奇心、興味関心を持たせるため楽しい時間を通して学ぶという工夫からである。

また国語（英語）の時間にも日本では珍しい工夫が見られた。実際にポテトチップスやチョコレートを食べて、その味や触感について色々な単語で表現してみようという内容である。園児たちは楽しみながら語彙力や表現力を高められていた。

もう一つの幼稚園の5歳児の教室は算数エリア、言語エリア、理科エリアなどいくつかのスペースに簡単に分けられていた。そしてそこには園児たちが作ったポスターや模型のようなものが並んでいた。私はそれらを見てとても驚いた。まず園児が当たり前のよう文字を書いているのである。また模型に関しては雨水の行方を表現していたので

ある。私は思わずこれらは園児たちが自ら作りたいと言い出したのか質問をしてしまった。話によると幼稚園で過ごす時間の中に 5 分間新聞を読む時間があるそうである。そして、その時分からなかったことについて先生に聞いたりして様々な方法でまとめるそうである。日本でも NIE (Newspaper In Education) という新聞を授業に取り入れようという動きはあるが、対象は小学生や中学生であり、就学前の子どもたちではない。やはり日本と比べると学習内容がだいぶ前倒しになっているように感じた。

日本の幼稚園は“遊びを通しての学び”を大切にしているのがよく伝わってくる。一方シンガポールの幼稚園は“学びを遊びに”しているように私は感じた。



5. 終わりに

教育者として子どもたちの可能性や伸ばしてあげたいと思う。その上で、チャレンジできる環境を提供してあげたいとも思う。ここでいう環境は、私の中では学校内や園内などの活動範囲を考えていた。しかし、子どもたちの成長に関わる環境は国規模であることに気づかされた。おそらくシンガポールという土地面積が狭く、多民族・多国籍国家という環境だから成り立つ教育なのではないかなと思った。シンガポールで良い教育

が必ずしも日本でも良いとは限らない。その逆もまたしかりである。教育以前の基盤が異なるため、単純に比較したり取り入れたりすることは難しいと思う。今回の学びを日本の教育、目の前にする子どもたちの実態に合わせて、形を変えて応用することが大切だと思う。

今回のシンガポール教育研修を通して多くの驚きから新しい教育の見つめ方を得ることが出来た。これからも日本の教育だけでなく、さまざまな国の教育の特色について調べ自分の引き出しを増やしたいと思う。